

海外派遣留学プログラム報告書

(報告期間:2021/09/08~2021/11/05)

1. 勉学の状況

私はこの9月からイギリスのニューカッスル・アポン・タインに位置するノーザンブリア大学でメディアについて学んでいます。20日から1週間は Induction Week というオリエンテーションが行われる週だったので、実際に授業が開始したのは27日からでした。ちなみに Induction Week ではあちこちでイベントが行われているため、そこで自然に友達作りをすることができました。

第1セメスターでは以下の授業を履修しています。

- ・ Cinema and Society (対面)
- ・ Media Methodologies (対面)
- ・ Hollywood Cinema (対面)
- ・ Academic Language Skills (オンライン/留学生向け)

上記3つは毎週それぞれ2時間の Lecture (講義)と1時間の Seminar (ディスカッション)で構成されています。Seminar の時間は事前に提示された資料について話し合うというものなので毎週しっかりと準備をしておく必要があります。私が履修している授業は映画を扱うため、事前課題として毎週映画を見るのですが、当然公開される映画に字幕は付いていないので、インターネットで英語字幕付き(日本語字幕付きはほぼ不可能)を毎回必死で探しています。また、私は映画について学術的に学んだ経験がなく専門的な知識が皆無のため、授業内容が理解できない時は日本語で書かれた論文を調べて背景知識を得ようと努めています。

また、肝心の英語についてですが、授業内に関しては分かりやすい教授もいればイギリス北部独特の訛りでかなり聞き取りが難しい教授もいます。当初は私の耳が悪いせいだと思い落ち込みましたが、ポルトガル人の留学生からイギリス人ですら訛りが強い教授の英語は分からないという話を聞き、外国人の私が全て理解できるはずがないと少し安心しました。それからはその場で全て聞き取ろうとするのではなく、事前に公開された授業の資料に目を通しておき、流れを掴んでから授業に臨むようにしています。

<学生の構成>

私が受けている授業はイギリス人が大半ですが、留学生もちらほら見かけます。ただ、私が仲良くしているスペイン人3人、ドイツ人 1 人、フランス人1人以外は交換留学生ではなく正規の学生として来ているため留学生とはいっても、あくまで「イギリス以外の国から来た」というだけで英語はほぼ完璧のように見えます。また私の友人たちも学習意欲がとて高く授業中に積極的に発言をするため、そういった周囲の影響で私もじっとしてはダメだという焦燥感に駆られます。

2. 生活の状況

<隔離生活>

コロナの影響を受け、1年待った上での念願の渡航でしたが、やはりまだまだコロナ禍ということで、入国後はまず自主隔離をしなければなりません。イギリスは入国後2日目と8日目に検査を行い、10日間自主隔離をするというものが規定ですが、政府が推奨している Test to Release というスキームもあります。こちらは、自己負担で5日目のテストを受けるとその陰性結果が判明し次第隔離を終了できるというもので、私はこちらを利用したため実際の隔離期間は丸7日間でした。



隔離期間を過ごしたホテル

私は寮の契約書に記載されている入居日から隔離を始めると Induction Week に間に合わないため、個別で隔離用のホテルを予約し、ニューカッスル国際空港からタクシーで 30 分程度の Houghton le Spring にある Highfield Hotel というところで隔離生活を過ごしました。また、隔離中に行う検査は自分でキットを使用した後ポストに投函するのですが、ポストまでの距離が遠くまだ右も左も分からない中でも大変でした。

そして隔離中は当然誰にも会えず、この先の不安感から気力もなくなって毎日ホテルの部屋にあるテレビをぼうっと眺めるだけの日々を過ごしていました。この報告書を書いている今は渡航から2ヶ月弱ですが、正直今のところ渡航してから最も精神的に辛かったのは隔離期間中だったと思います。

<寮生活>

無事全て陰性の検査結果を頂き、隔離を予定通り終えることができました。ホテルから寮までの移動もタクシーでしたが、寮の住所まで行かなかったため分からないと運転手さんに言われてしまい、私が Google マップで運転手さんを道案内するという想定外のことがありながらもなんとか寮までたどり着きました。

寮はコロナの関係で予約するのが遅くなってしまい、あまり選択の余地がなかったため期待していませんでしたが、結果的に良いところに住めたのではないかと考えています。寮のすぐ下の階にとっても大きい Tesco というスーパーがあり、そこで基本的に必要なものは全て揃えることができます。また寮自体がとんでも新しいので部屋も共有スペースも綺麗です。キャンパスからは徒歩30分とかなり遠いのが唯一のデメリットですが、メロに乗るようになってからは大変快適に通学できています。

また、フラットメイトはイギリス人とインド人の女の子2人です。インド人のフラットメイトに関してはこの報告書を記載しているほんの数日前に来たのでまだあまり親しくなっていませんが、これから良好な関係を築いていきたいと思っています。

<Society について>

イギリスの大学には Society という日本でいうサークルのようなものがあります。会費を払えば各 Society が開催するレッスンやイベントに参加できます。私は現在 K-POP Dance Society、Salsa Dance Society、そしてニューカッスル大学の Japanese Society に参加しています。特に K-POP Dance Society については共通の趣味で盛り上がるので毎回とても楽しみにしています。これは私自身驚いたのですが、韓国ドラマや K-POP はイギリスでも人気があり、一定数韓流ファンがどこに行っても必ずいます。特に最近「イカゲーム」がイギリスの Netflix の1位を走っていたため、授業内で「イカゲーム」のことが話題に上がったり、ハロウィンのときにはドラマの仮装をした人をたくさん見かけたりと韓流ブームを感じます。私にとって韓流は半生を費やしてきた趣味なので、イギリスでこんなにも多くの共通の趣味を持つ友人に出会えたことが予想外で感激しました。

また、ニューカッスル大学の Japanese Society の方にはまだあまり顔を出せていないのですが、そこで数名の日本人留学生とようやく知り合うことができました。これは私自身想定外だったのですが、現在ノーザンプリア大学には日本人が驚くほどおらず、誰もが私が日本人と言うと「初めて見た！」と言われるほどです。こういった状況のため、この Society は日本人と交流できる貴重な情報交換の場になるので、これからも積極的に活用していきたいと思います。

<内面の変化と日本人であることについて>

渡航から2ヶ月弱経過し、何よりも良かったことは留学前よりも自己肯定感が上がったことです。もちろん母国語ではないので言いたいことを全て伝えることはできませんが、それぞれ母国語が全く違う国から来ている人たちと英語という共通言語を媒介して会話ができているということの喜びを毎日実感しています。また、人見知りしてられる状況でもないの自分自身の性格が以前より社交的で明るくなったようにも感じます。

また、日本に対して関心を持っている人が本当に多く、日本という国自体の良さを周囲から私自身が教わっています。特に驚いたのが日本の宗教観についてなのですが、それぞれ違う場面でキプロス人、スペイン人、ドイツ人の友人から日本の宗教に対する考え方が素晴らしいという話をされました。3人が日本の独特な宗教観を理解していること自体が驚きですが、それぞれ自国のキリスト教に疑問を抱いているようで、日本のような無神論者でも絶対的な一神教でもない文化と根付いた価値観に憧れると聞きました。留学するまで、海外から見た日本はアニメと寿司のイメージくらいしかないだろうと勝手に思っていたので、ここまで日本の価値観を理解し、日本人以上に愛してくれる人達がいることに感動してしまいました。イギリスに来て自分自身の内面も変化しましたが、これまで気が付いていなかった日本の良さを色々な国から来た友達と出会って実感することができ、自分自身のことをより好きになれたような気がします。



ハリー・ポッターのロケ地

- アニック城 (上)
- ダラム大聖堂 (左)

海外派遣留学プログラム報告書

(報告期間：2021/11/06～2022/03/05)

1. 勉学の状況

イギリスに来て半年が経過しました。留学に来る前はホームシックになったり精神的に苦しくなったりするときにきつと来るだろうと思っていましたが、半年が経った今振り返っても一度もホームシックになることなく、本当に想像以上に楽しい日々を過ごしています。

学業面については、12月半ばに Semester 1 の授業が終わり、お休みの後1月下旬から Semester 2 の授業が始まりました。Semester 1 を終えての感想と新しく始まった授業について以下に記述します。

< Semester 1 を終えて >

最初はどうしていいかわからず硬直していた私ですが、段々と慣れていきディスカッション中心の Seminar でも自分の考えを話せるようになりました。Seminar では予習をきちんとしておかないと全くついていくことができませんが、Semester 1 で履修していた授業では毎週指定された映画の視聴が課題とされることがほとんどだったため、元々映画が好きな私としては予習もあまり苦に感じませんでした。ただ、指定される映画は先生がリンクを貼ってくれるのですが、当然その動画には一切字幕がついていないので、配信サイト等で日本語字幕または英語字幕が見つからない場合はそのまま視聴するしかありません。奇跡的に台本が見つかった場合はその台本を読みながら映画を観るという特殊な手法を取ったこともあります。授業の課題で出される映画は古典的な映画が多いため、字幕一切なしで見なければならぬときが多く、そういった場合は細かい内容の理解に時間がかかりました。しかし、成績は最終課題のみに対する評価で付けられ、Seminar 中の発言の良し悪しは成績に影響しないため、慣れていくにつれ伸び伸びと取り組むことができました。イギリス人がほとんどの中では、発言を要求されると何を言ってもダメなようにどうしても感じてしまいますし、逆に他のイギリス人学生の発言は全てが天才的に感じてしまいます。しかし、発言内容が成績に加味されないとすると、どんなに変なことを言ってしまったとしてもその場で恥をかく程度なので、あまり神経質にならずに思ったことを素直に言うことができました。また、イギリスでは活発な発言が求められるのにも関わらず、出席すら成績に入らないので中にはほとんど学校に来ていないような生徒もいます。ただ、その代わり授業を聞いていないと最終課題で必ず苦しむことになるので、ある意味日本よりもシビアな世界に感じます。

< 最終課題について >

最終課題には留学生向けの Academic Language Skills 以外は全て 3000words のレポートが課されました。これまで英語で 3000words もの長さの文章を書いたことがなかったので、これを各

授業合わせて3本仕上げなければならないのは本当に大変でした。一授業で与えられる単位数が日本よりも多いので妥当なのかもしれませんが、実際に書いてみると大体レポート1本につきA4で8~10枚くらいになり、千葉大学で出されていた課題に比べるとかなり多いように感じました。また、課題のテーマも決まったものが提示されるわけではなく、授業に関連した問を自分で設定しなければならないところも苦労した点でした。純粋に英語で参考文献を集め、英語で書くということの難しさもありましたが、レポートをどのような構成でまとめていくかという方針を立てることが想定以上に時間がかかり、一緒に授業を受けていた友人が皆かなり早くから最終課題の準備をしていた理由が身に染みて分かりました。

このように私の留学で今のところ一番苦労した最終課題ですが、2月頃には添削が返ってきました。千葉大学では基本的に提出したレポートに対して何がどう評価されたかどうかまでは分からないことが多いですが、Northumbria大学ではどの授業もかなり細かく先生がコメントを付けてくださるので、次回に向けて大いに参考になるなと感じます。私はあるレポートの中に、個人的な意見として人種差別が描かれている作品におけるアジア人に対する無意識な差別の問題を書いたのですが、それについて先生から大変興味深いという旨のコメントをいただき、今後へのモチベーションにも繋がりました。先生の労力は大変でしょうが、一生懸命書いたレポートが見える形ですぐに評価される仕組みは学生にとって大変プラスになると思います。

また、千葉大学とのもう一つの違いはレポートを提出した後、Turnitin という剽窃チェッカーのシステムにより、レポートが他の資料との Similarity が何%あるかがすぐに表示されることです。引用文献として使用したものも全て Similarity に含まれるので、最初はドキッとしましたが、逆に自分自身でも確認ができるので安心材料にもなると思いました（勿論 Similarity があると表示されても参考文献を記載していれば問題ありません）。

< Semester 2 の授業 >

1月の下旬から始まった Semester 2 では、以下の授業を履修しています。

- ・ Current Affairs in Public Relations
- ・ Cultural Identities on Screen
- ・ Researching Audiences

Lecture と Seminar という構成は Semester 1 と同様で、今回も全て対面で行われています。Semester 1 は理論や方法論についてのものが多かった印象ですが、今回は全体的に実際に行われている取り組みなどに焦点が置かれています。また、Semester 1 では映画の分析が主な課題でしたが、Semester 2 の授業からは映画にとどまらず広告やテレビ、SNS など範囲が広がり、また個人作業よりもグループワークが増えた印象です。今回も前提知識がない状態で飛び込まなければなりません、メディアについて様々な角度から学ぶことができるのでこれからが楽しみです。

また、私がイギリスに来て一番仲良くしていたドイツ人の友人が Semester 1 を以って帰国してしまったので、新しい学期が少し不安でしたが、これまで色々なところに顔を出していたおか

げで全ての授業に知り合いを見つけることができました。現在は基本的にスペイン人、フランス人、マレーシア人の友人と一緒に授業を受けています。ちなみに日本人は Northumbria 大学の中では未だに誰一人見つけていません。Newcastle 大学の方には日本人がたくさんいるのを見ると不思議ですが、必然的に日本語が絶対に伝わらない環境に身を置くことができるのは本当に幸運だと感じています。

2. 生活の状況

< Society について >

Semester が切り替わったタイミングで、何か新しいことを始めたいと思い、Drama Society に入りました。留学開始月の報告書にも Society について記載したように、イギリスの Society は定期開催のイベントに参加するという形式のものが多いですが、Drama Society は日本にもあるようなしっかりとした演劇部で、週に2回必須参加の練習があります。入会方法も会費を払うだけというのではなく、Semester 2 が始まってすぐに行われるオーディションに行かないと参加自体ができません。オーディションは Director さんと1対1で行われるため、想像していたよりは緊張しませんでした。誰も知り合いがない中、イギリス人だらけの中で当日手渡される台本を読むというのは本当に不安でした。何度も引き返そうかと思いましたが、今振り返るとあの時勇気を出して飛び込んでよかったと心から思います。オーディションの結果、無事に役をもらうことができ、現在は3月末に行われる公演の準備をしています。練習期間が短いので、公演自体はあまり大々的なものではありませんが、元々演劇が好きなのもあって全ての練習に胸をときめかせています。

また、私はせっかくイギリスにいるのにも関わらず、自分の英語がどう思われるのかが不安で無意識のうちにイギリス人を怖がってしまうところがありました。そのためこれまで友人の多くは非英語圏出身者でしたが、今回 Drama Society に入ったことで必然的にイギリス人と関わる機会が圧倒的に増えました。台本を読むだけでなく、即興劇を練習としてやることも多いので英語を自在に操ることができないことへのもどかしさは常に感じますが、日々のそうした緊張感がさらなる自信に繋がっていると感じます。

< 休日について >

せっかくイギリスにまで来ているのに本当に勿体無いですが、コロナウイルスの影響でほとんど遠出をしていません（未だロンドンすら行っていません）。そのため、昨日はどこへ行った今日はどこへ行ったという旅行日記のようなものは全く書けないのですが、生活圏内で楽しく過ごしています。Newcastle Upon Tyne はあまり大きな街ではありませんが、探してみると素敵な場所もたくさんあるので、以下ではお気に入りスポットについて紹介しようと思います。

Newcastle Upon Tyne は学生街ということもあってか、若者に人気のありそうなお店が数多く並んでおり、低価格のカフェや洋服屋さん、無料で入れる美術館、そして夜になると数多くあるナイトクラブで街が賑わいます。毎日当たり前のように通っていると段々慣れてしまっていますが、

改めて考えるとなかなか良い場所に大学があるなと感じます。中でも私が最もよく通っているのは大学から徒歩15分くらいのところにある Grainger Market という商店街で、ここでは低価格でピザやインド料理、ドーナツなどが購入できる他、オーガニック製品も数多く売られています。ドイツ人の友人がこの場所をととても気に入っていたためよく一緒に行ったのですが、彼女はヴィーガンのため Grainger Market では本来値段が高いヴィーガン製品が安く手に入ることを喜んでいました。留学に来てからヴィーガンやベジタリアンの友人にたくさん知り合うのですが、実際にイギリスではどこのレストラン、カフェに行っても必ずメニューの中にヴィーガンのオプションがある上、どれも普通の食事と変わらない美味しさです。以前日本にいたときに知り合ったヴィーガンの留学生が日本では食べられる場所がほとんどないため、毎日お弁当を持ち歩いていたのを思い出すと、日本ではヴィーガンの人々が外食できる機会はかなり限られているように感じます。千葉大学の食堂にもハラールフードはありますが、ヴィーガン向けのメニューはなかったような気がします。他にもイギリスに来て驚いたのはグルテンフリーのメニューがあ



ヴィーガン料理

あったり、牛乳を低脂肪牛乳や豆乳、アーモンドミルク等への変更が容易だったり、どこに行ってもあらゆるオプションが提示されていることです。全ての人々が自分の健康や信念を環境によって害されないということは、日本も見習うべきポイントだと感じます。

また、Newcastle Upon Tyne ではショーを見られる機会もあり、私のお気に入りには Newcastle Theatre Royal という劇場です。先日こちらで公演されていた Adam's Family のミュージカルを観に行ったのですが、劇としてのクオリティが驚くほど高いのは勿論、劇場自体の広さと美しさにも感動しました。素晴らしいミュージカルが遠くまで行かなくても鑑賞できる上、値段も 30£ (約 4500 円) と非常に安いのでこれからも是非通い詰めようと考えています。また、この劇場ではミュージカルだけではなくバレエも上演しているそうなので、次また観に行くのがとても楽しみです。



Newcastle Theatre



The Stand Comedy Newcastle

かったのでとても貴重な経験になりました。

さらに、この街ではお笑いを見ることもできます。The Stand Comedy Newcastle では、毎日のようにスタンドアップコメディのショーが開かれています。Newcastle Theatre Royal とは異なり、小さな劇場ですが、むしろそのこぢんまりとした感じによってコメディアンの方々との距離が縮まり、観客の一体感も増している気がします。また、コメディアンが客いじりをしながらショーが行われるのでただ観ているだけではなく参加型のような雰囲気も海外でしか味わえない醍醐味に感じます（ちなみに一緒に来ていたキプロス人の友人は何度もいじられていました）。私は昔からお笑いが大好きですが、日本では漫才やコントが主流のため、スタンドアップコメディを生で観たことはな



York の街並み

のためクリスマスマーケット自体に詳しく、何がドイツ由来のものをか教えてもらいながら歩いていました（ちなみにヨーロッパ出身の友達の言うこれはイギリスっぽい、これはヨーロッパならどこにもある、といった違いが全く理解できません・・・私には全てが珍しいのでイギリスにあるものは全部イギリスっぽい！と思ってしまうますが実は他のヨーロッパ圏の国の文化由来のものがかかなり多いです）。

コロナのため遠出はできていないと前述しましたが、唯一 York に日帰り遊びに行きました。York は千葉大学との協定校である York St. John 大学がある場所で、私自身留学先を決める際、Northumbria 大学とどちらにしようか迷っていたところでもあるため絶対に一度は訪れたいと考えていた街でした。Newcastle Upon Tyne とは異なり York は観光地のため、たくさん人で溢れており、有名な観光スポットやおしゃれな店がたくさんあります。また、私が行った時期はクリスマス前だったのでクリスマスマーケットが開かれており、激甘のお菓子 Fudge や温かい Mulled Wine など日本ではなかなかお目にかかれないものを楽しむことができました。一緒にいった友人はドイツ人

<クリスマス>

ハロウィンが終わった 11 月から、イギリスでは街がクリスマス一色で染まります。大学の近くでもクリスマスマーケットが開かれる上、あらゆるお店や通りがライトアップされ、ギフトや Advent Calendar（クリスマスまで一日ずつ小箱を開けて楽しむもので、中に入っているものはお菓子だったりコスメだったり様々です）があちらこちらで販売されていました。11 月からそれだけの盛り上がりを見せるなら、当日はさぞ賑やかになるだろうと思いきや、当日になると街から人が消え去り、店は全て閉まりメトロすら動かないため、一年で一番寂しい日と言っていいほど閑散としていました。日本の賑やかなクリスマスは、クリスマスの日にも一生懸命働いているたくさんの人々のおかげで成立しているということを痛感させられます。

↓大学近くのクリスマスマーケット



ヨーロッパでは、クリスマスは家族と過ごす日のため、ほとんどの友人が自国に帰ったり家族が会いに来たりするため、家族に会えない私は寂しい日になるなと思っていましたが、幸運なことにスペイン人の友人が家族との食事に誘ってくれたため、その友人家族と一緒に過ごすことができました。正直たった一人で友達の家族の中に混ざることに対する緊張はありましたが、想像以上に優しくしていただき、絵に描いたような温かい家庭だったのでとても安心して楽しむことができました。クリスマス映画を見たり、ボードゲームで遊んだりして最初に感じた緊張感は嘘のように素敵なクリスマスを過ごすことができました。招待してくれた友人には本当に感謝です。

<寮での生活>

コロナのため渡航できることが分かったのが出発ギリギリだったため、選択肢がほとんど残っていない中で選んだ寮でしたが、半年過ごしてみて本当にこの寮で良かったと思っています。私のフラットは部屋数が数ないためフラットメイトが 2 人しかいないので、フラットの中で友達をたくさん作りたい人には向いていないかもしれませんが、私はどちらかというと家では自分の時間が欲しいタイプのため、とても快適に過ごすことができます。また、他の寮では洗濯はコインランドリーが一般的ですが、私の寮はフラットに洗濯機があり毎回お金を払う必要もないのでこの点はかなり大きな魅力です。また、受付が 24 時間開いているので何かトラブルがあればすぐに対応してもらうことができ、以前フラットのドアが大破したときもあっという間に修理されていました。その分他の寮に比べて寮費は高いですがこのようなメリットとスー

パーまでの圧倒的な近さを考えるとむしろ安いかなと思えてきます。部屋の壁が薄すぎて電話の声やアラームの音すら筒抜けなのが一つ難点ですが、私は騒音があまり気にならないので問題なく生活できています。

フラットメイトは最近イギリス人が一人退居して別のイギリス人が入居してきたので、今はその女の子ともう一人インド人の女の子と暮らしています。入れ替わり立ち替わりが激しい上、皆あまり干渉しないタイプなのでフラットメイト同士で何かをするということはあまりなく、純粹に隣人という関係性です。イギリスに来たばかりの頃は、フラットメイトと仲良くならないと友達ができない！ここで人間関係を作らなければ！と思っていましたが、授業や Society、友達の友達など意外にも知り合う機会はとても多いので、必ずしもフラットメイトと友人にならなければならないと焦る必要はないと思います。他の寮に住んでいる友人の話を知っていると、仲良くなることよりも衛生観念が合うことやトラブルをお互いに起こさないことの方が生活する上では重要だと感じます。

<イギリスの天気と食べ物>

最後に渡航前に抱いていたイメージと実際の違いについて記述しようと思います。イギリスというと、天気が悪い！寒い！ご飯がまずい！というイメージがある方も多いと思います。私自身実際に来るまではかなりその印象が強く、ユニクロで買った大量のウルトラ極暖や日本では使ったこともないレインコートを用意し、留学直前は9ヶ月間まずいご飯に耐えるためこれでもかというほどたくさん食べ、史上最高に脂肪を蓄えて留学に臨みました。半年経過した今、その全てが全く必要なかったとはっきり言えます。まず、天気についてですが確かに雨の日は多いものの、そのほとんどが雨とカウントしていいのかわからないような小雨のため、傘が必要な日はほとんどありません。また曇りの日も多いですが気になるほど毎日どんよりしているわけでもありません。また、緯度が高いため極寒の地だろうと想像していましたが、正直日本の方が寒いのでは・・・？と思うほどです。この報告書を書いているのは3月の段々と暖かくなり始めた頃ですが、振り返ってみて寒い冬を過ごしたという印象はありません。以前仙台に行った際は毎日凍え死にそうなほど寒かったので私が寒さに尋常じゃなく強いということではないと思いますが、イギリスではせっかく持ってきたユニクロの極暖を一度も使うことなく、薄手のヒートテックで冬を過ごしました。また、部屋の中はセントラルヒーティングによりとても温かいため、あまり厚着をしていると暑いくらいです。正直、日本の「夏は異常に暑く冬は異常に寒い、雨が降ったらびしょびしょになる」という気候があまり好きではなかったので、個人的にはイギリスの気候の方が気に入っています。ロンドンにはまだ行ったことがないので、南の方に行けばイメージ通りの天気なのかもしれませんが、少なくとも Newcastle Upon Tyne はかなり過ごしやすい気候です。ただ、イギリスの気候で想定外だったのは暴風が頻繁に来ることです。空は晴れているのに台風レベルの暴風で建物の窓や扉が壊れ、授業が休講になることも複数回ありました。そういう日は前に進めないほどの強い風が吹くのですが、その回数が意外に多いのでその点は正直誤算でした。ただ、雨や寒さに関しては本当に日本で語られているほどではありません。

次に食べ物についてですが、イギリスに来てからというものこれといってまずいと感じたものはありません。ふらっと入ったカフェやレストランも普通に美味しいですし、日本と比較して味が大きく劣るということはありません。特に、Victoria Sponge Cakeはシンプルな見た目の割に信じられないほど美味しく、帰国したらこれが食べられないのかと思うと辛くてたまりません。ただ、日本の食材は高級すぎてなかなか手が出せないため、両親に日本からお餅やお茶漬け、お味噌汁などを送ってもらいました。インスタントのお味噌汁を飲んだときは塩気の懐かしさとだしの美味しさとで心から感動しました(もしかしたらイギリスの食事が美味しいのではなく私の舌がおかしくなってしまった可能性も否認しません・・・)。また、これはイギリス生活というよりも一人暮らしあるあるかもしれませんが、自炊が段々と面倒になり調理が簡単なものに頼ってしまうため、栄養が偏ってしまいます。どうしても脂質糖質まみれになってしまうので、これから留学に行く方には、絶対に渡航前に「どうせ留学に行ったら痩せるから」なんていう言い訳で脂肪を溜め込もうとしないことをお勧めします(そのまま太り続けます)。



Victoria Sponge Cake

<半年間を振り返ってみて>

本当に周りの環境に恵まれていたおかげで、ここまで楽しく充実した日々を送ることができました。勿論、これはたまたま私が幸運だったのもあると思いますが、一つ留学に来てから自分の考えを変えた点があります。元々私はインドア派で出不精だったのですが、留学に来てからは、誘いは基本断らない、少しでもやりたいと思ったことは全部挑戦してみるという精神に変えました。留学中は自分から関わりに行かないとただ大学と寮を往復するだけの日々になってしまいがちだと思います。最初は何事も緊張しますが、何にでも飛び込んでみるとそこから友達ができたり、新しい経験に繋がったりすると感じます。待ちの姿勢ではなく、行動力をつけることが何より大事であると半年を振り返ってみて思いました。留学も残すところ約3ヶ月になりますが、後悔しないよう一日一日を大切にしながら、これからも新しい物事に貪欲であろうと思いません。

海外派遣留学プログラム報告書

(報告期間：2022/03/06～2022/06/05)

1. 勉学の状況

ついに留學生活が終わりを迎えてしまいました。イギリスに到着してすぐの頃は途方もないくらい長く感じましたが、今思うと9ヶ月という期間は短過ぎるほどあっという間だったと思います。学業に関しては、Semester 2 も終わりを迎えたのでそちらについて以下に記述します。

< Semester 2 について >

Semester 1 は授業が忙しかった印象がありましたが、Semester 2 は全体的に気が抜けてしまうのか講義自体の数が少なく、学生の出席率も非常に低いものでした。授業が少なかったのは4月のイースター休暇の影響もありますが、何よりストライキが頻発していました。日本の大学ではストライキのせいで授業が休講になるというのはなかなかない状況だと思いましたが、イギリスでは数え切れないほどストライキによる休講がありました。私の場合は交換留学ですが、正規の学生が Northumbria 大学に納めている学費は非常に高いはずなので、こんなに頻繁に休講になっていたら学生が怒り出してしまうのではと思うほどでした。しかし、ストライキによって労働者の権利を堂々と主張することができるのは、日本にはない良いところなのかもしれません。

ストライキだけではなく、この時期はイギリスでもコロナが蔓延し始めていたため教授がコロナに感染してしまったり、コロナではないが体調を崩されてしまったり、強風が吹いてキャンパスが閉まったりとかなり授業数が減ってしまいました。また、授業数が減ると必然的に英語を使う機会が減ります。私の英語力はまだあまり盤石なものではなく、「慣れ」によって身に付けたものであるため、会話する頻度によって明らかに能力値が上下します。そのため休講が続いた後のディスカッションの授業などは困難に感じました。中でも Current Affairs in Public Relations という授業は Semester 1 から連続して履修している人が多い中、Semester 2 から飛び込みで入った人が私だけだったため注目を集めてしまい、毎回何かしら指されるようになったので毎回覚悟を持って授業に挑んでいました。

< グループワーク >

Semester 1 では個人でレポートを書く授業ばかりだったので、グループワークに取り組める授業を履修したいと思い、事前にシラバスを調べて履修スケジュールを組みました。Researching Audience という授業は、メディアの視聴者側の反応を調査するというものですが、授業はむしろその方法論に着眼点が置かれていました。授業を通じて行われたのは4人グループで実施する Focus group という調査方法です。Focus group とは参加者を少数集め、ある議題に沿って参加者同士が対話をしてもらうことで行う定性調査のことです。授業では各グループが自由に決

めたテーマに基づいて、Focus group を行い、結論よりもその過程に着目したレポートを最終課題として提出することが求められていました。私のグループはマレーシア人2名とスペイン人1名で構成され、Focus group の参加者はグループメンバーそれぞれが友達を連れてくる形で調査を実施しました。

しかし、調査自体は円滑に進んだのですが、最終課題提出を目前にしてグループメンバー同士でトラブルが起きてしまいました。グループの集まりになかなか来ることができなかったスペイン人に対し、リーダーを務めていたマレーシア人の一人が「フリーライダーは許せない」と怒ってしまったのです。マレーシア人の彼女はそのまま怒ってグループのチャットを退出し、誰からのメッセージに対しても返信をしてくれなくなってしまったため、そのままギクシャクした状態で終わりを迎えてしまいました。私自身、このグループワークを行う前から両者共に友人として仲良くしていたためにこのことは非常に残念で、間を取り持つことができなかったことにも反省しています。Semester 1 でグループワークのある授業を履修していた友達から、「グループワークはトラブルが多く大変だ」という話を聞いていたのですが、自分自身がまさかその状況に直面するとは想定していなかったので、正直衝撃を受けてしまいました。あまり良い形で終わることができなかったのは残念でしたが、何よりも協調性を大切にする文化で育った私から見るとお互いに言いたいことをはっきり言えるのはなかなかカッコイイなとも思う部分があります。

< 授業を終えて >

Semester 1 同様、Semester 2 でも最終課題が100%で評価が付けられるため、各授業3000wordsのEssayを書くのはなかなか緊張感がありました。また、Semester 1 で時間がギリギリになってしまった反省を活かすつもりだったのが、学ばない私は結局前回同様に締切直前になって焦ることになってしまいました。結果的に全ての授業で単位を取得することができましたが、もう少し時間的な余裕があればもっと楽しんでレポートを書くことができたのかもしれないと思います。というのも、今回の授業の課題は変わったテーマで、Focus group の他にPRに関するブログ記事を書いたり、自分がピックアップしたテレビドラマについてのレポート（私は以前どハマリしていたNetflixのOrange is the new blackをテーマに書きました）を書いたり面白みのある課題だったのです。じっくり時間をかけて課題に取り組めばもっと掘り下げて自分自身も楽しみながら書くことができたかもしれません。

この度の留学を通じ、初めてメディア学というものを学んだことでメディア研究の方法や着眼点など数多くの新しい発見がありました。元々卒業論文のテーマに考えていたものはメディア学とは異なる分野でしたが、留学を通じて学んだ手法を組み合わせる卒業論文に活かしたいと今は考えています。

2. 生活の状況

< Drama Society >

3月末には私が所属していた Drama Society の公演がありました。想像以上に練習期間が短い上、小道具や衣裳など演出に使うものは手作りする必要があったので公演直前は非常にバタバタしていました。短期間に舞台を完成させることは勿論大変でしたが、何度もリハーサルを繰り返したり、たまに Director さんの家に行って小道具作りに励んだりするのはとても楽しく、本番までの過程自体がワクワクする毎日でした。公演自体は大学校内にある小さなホールを使って行う小規模なものでしたが、日本人が一人もいない環境下で英語の台本を覚え、役を演じることができたことに大きな達成感を覚えました。2日間行われる公演に扁桃炎のせいで1日しか出演できなかったのがとても悔やまれますが（詳しくは次の項目で記述します）、それでも最後に舞台上に立ってこれまで練習してきた成果を発揮できたことは今でも大切な思い出です。そして何よりも、練習を通じてたくさんの仲間ができ、そこから交友関係をさらに広げることができました。Society に入った初日、Audition に参加しようかどうか迷って会場の前を一人でぐるぐる回っていたことが昨日のように思い出されますが、もしあの時勇気が出ずに Drama Society に入ることを諦めていたらこれだけの経験を得ることができなかったのかと思うと恐ろしく思います。何事も挑戦してこそ得ることのできる経験があると実感を持って学びました。



本番直前の舞台上

< イギリスで病院に行く >

留学自体は本当に毎日が充実していて楽しいことばかりでしたが、ある意味異常な環境にしばらく身を置いていると想定外のタイミングで体調を崩してしまうこともありました。Drama Society の公演前日、朝起きると喉が激しく痛むことに気が付きました。最初は痛み止めを飲めば治るだろうと軽く考えていましたが、数時間毎にみるみる痛みが増し、お昼頃には喉が腫れすぎて声を発することも、水を飲むこともできなくなってしまいました。このままでは脱水になってしまうと思い、病院に行こうと考えましたが、イギリスの病院システムは日本と異なり非常にややこしいのです。まずイギリスでは GP というかかりつけ医のシステムがあり、熱が出たときも耳が痛いときも目が痒いときもとりあえず最初は事前登録した近くの GP に行きます。しかし、この GP は予約を取るのが非常に難しく、大体1ヶ月待ちくらいになってしまいます。私が登録

していた GP も予約がいっぱいで、一言も声を発することすらできない状態で一体何週間待てば良いのだろうと途方に暮れてしまいました。そのとき千葉大学経由で申し込んでいたトータルサポートプログラムのことを思い出し、緊急で診てもらえることができる近くの大きな病院を紹介していただきました。なんとか病院に辿り着き、声が出せないので筆談での意思疎通を図りながらすぐに診察と検査をしてもらい、人生初めての点滴も経験しました。朝には人生最悪の絶不調でしたが、点滴により体調はその日のうちにあつという間に回復し、夜には元気な状態で帰宅することができました。

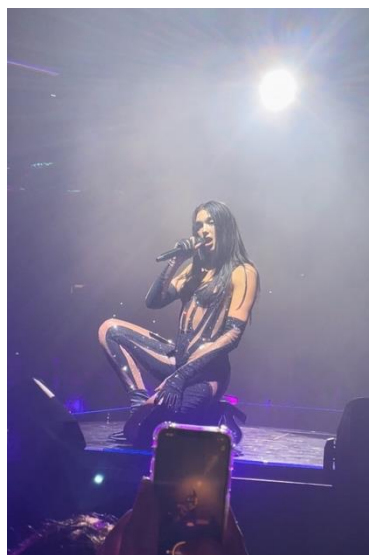
驚いたのは、半日くらい病院のお世話になり点滴まで打ったにも関わらず、医療費が一切掛からなかったことです。渡航前に加入必須の NHS の保険に入らざるを得ず、その時はその保険が持つ意味をよく理解していませんでしたが、医療費が渡航前に加入した NHS の保険で全てカバーされていたとのことでした。

今回私がなったのは扁桃炎ですが、幼い頃以外扁桃腺で問題が起きたことはありませんでした。もともと喉はあまり強い方ではないですが、公演前に忙しくしていたことから免疫力が低下し、思わぬ事態になってしまったのだと思います。留学に行く前は、「自分は健康体だから保険のお世話になることはない」と考えてしまうかもしれませんが、慣れない環境に身を置いていると体質も変わってしまいます。今回はトータルサポートプログラムと NHS の2つの保険に大変救われたので、保険に加入することの大切さをここに記しておきます。

<就職活動について>

本当は最後まで留学期間中は留学のことだけを考えていたかったのですが、Twitter のトレンドに頻繁に上がる「就活解禁」の文字に焦りを感じ、留学終盤は就職活動に忙殺されていました。コロナ禍の影響によりオンライン就活が一般化し、面接をオンラインで行う企業が増えたので思っていたよりも海外にいるということの制約を受けずに就活をすることができました。私はコロナによって留学が一年延期になってしまった時、就活には不利になる覚悟で卒業時期をずらしての留学を決断しましたが、実際にはあまりその影響はなく、むしろ留学中の体験に興味を持ってもらえることが多かったように思います。実際、本来の予定であれば帰国後に就活を本格的に始める予定でしたが、帰国前に内定をいただくことができました。勿論必ずしも留学経験が就活に置いてプラスになるというわけではないですが、スタートが遅かった割に就活を納得のできる形で終わらせることができたのは留学のおかげだと思います。

<Dua Lipa の LIVE>



至近距離で見た Dua Lipa の姿

演劇と就活と最終課題とで忙しかった留学終盤ですが、たまたま友人のチケットが余っていたおかげで Dua Lipa というイギリス人アーティストの LIVE に行くことができました。日本にいた時からよく彼女の曲を聴いていたので、スタンド席でかなり間近で見ることができたことに心から感動しました。イギリスでは LIVE 中に写真や動画等の撮影が認められており、お酒も販売しているので本人の声が聞こえないほど観客が歌っているように、日本で開催される LIVE とは様相が違いそれもまた醍醐味の一つでした。私が帰国する直後にちょうど多くの有名アーティストの LIVE がイギリスで行われる予定だったので、そちらに行くことができなかったのは残念でしたが、最後に大好きなアーティストを間近で見ることができたのはとても貴重な思い出になりました。

<留学を終えて>

あっという間に終わってしまった留学ですが、結果的に一度もホームシックになることも、大きなトラブルに見舞われることもなく最後まで最高の日々を送ることができました。あまりにも充実した日々がむしろ怖くなり、帰国直前には「これが私の人生のピークなのではないか」と逆に不安になることもありましたが、帰国した今は留学という経験が私の人生の第一歩になったと考えています。留学を経て、人生観が 180 度変わった！とまでは言いませんが、確実に私自身の内面に良い影響がもたらされたと感じます。何よりも、これまで実家暮らしでぬくぬくと過ごしてきた私が一人で海外に飛び立ち、誰も知り合いのいない環境で少しずつ友達を増やし、日本語が一切通じない世界で生活をする事ができたという事実が私に大きな自信を与えてくれました。これから先にたとえ困難なことが訪れても、この留学経験が今後の私の後押しをきっとしてくれることでしょう。コロナ禍にも関わらず、想像していた何十倍もの充実した経験をする事ができたこと、そして私の留学の実現のために多くの方々が協力して下さったことにこれからも感謝しながら、また次の新たな一歩を踏み出していこうと思います。



Newcastle の夜景